



その3

今中 楓 溪

—いまなかふうけい—

(平成20年 8 月 1 日号—第256号)



「野崎参りは屋形船でまいろ どこを向いても菜の花ざかり」

昭和10年、東海林[しょうじ]太郎の歌声により爆発的に流行し、全国を風靡[ふうび]した「野崎小唄」。この作詞者が今中楓溪です

明治16年、大阪府河内郡水走村(現・東大阪市)に生まれた楓溪は、少年時代から文筆に親しみ、漢詩や短歌などを文学雑誌に盛んに投稿していました。同39年に広島高等師範学校を卒業し、県内で中学教員として1年間勤務後、同40年、栃木県立大田原中学校に転任、高等師範学校入学後中断していた詩作をこのころから再開しました。また、同年樟葉村の今中家を継ぎました。

同44年、北河内郡立河北高等女学校(昭和3年に寝屋川高等女学校と改称)に首席教諭として赴任し、以後、昭和12年に退職するまで、同校の支柱となり、北河内の女子教育を支えました。



楓溪の歌集「白日」「青潮」と、主宰していた短歌会の機関誌など

歌人としての活動は、大正14年に最初の歌集「あかね」を刊行。その後、「白日」「青潮」を刊行し、評価を不動のものとなりました。さらに昭和7年から、女性短歌会「若菜短歌会」を主宰し、機関誌「若菜」を発行しました。

楓溪の創作分野は、短歌だけにとどまらず多岐にわたります。北河内郡内の学校校歌には、彼の作詞によるものが多く、枚方市内では樟葉小・枚二小・一中・二中・三中の校歌が確認できます。